

二次元3D文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

ふちふちメイド
2007
姫織
外伝

岡下誠
表紙/あきら



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ムチむちメイド姫織外伝』
に基づいて作成しております。

※本作品は二次元ドリーム文庫『ムチむちメイド姫織』（キルタイムコミュニケーション・刊）とあわせてお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



心待ちメイド

+ 2008 +

姫織
の外伝

登場人物紹介

Characters

あいほらひおり

相原姫織

優に仕えるメイド。日本人男性とイギリス人女性との間に生まれたハーフで、一本鞭の使い手。ちょっぴりサディスティックな性格。

たちばなゆう

立花優

姫織の主人である少年。面立ちは可愛く、十歳歳の年齢よりも幼く見える。優しく穏和な人柄。

たちばなれいか

立花麗香

優の従姉。二十八歳の若さで企業グループを束ねる才女。

鳥のさえずりが聞こえる。

立花優は、心地よいまどろみの中でそれを聞いていた。

(朝か……)

うつすらとまぶたを開ける。

(あれ……。まだ夜なのかな?)

目の前が薄暗い。

しかも、何だか身体が重かった。何者かにのしかかっているような感じだ。

また、甘く濃密な香りに鼻をふさがれている。

(この匂いは……)

よくなじんだ香りだ。嗅いだけで、条件反射的に男性器がいきり立ってしまうような牝の臭気である。

この甘美で濃厚な香りと、目覚めの生理現象とが相まって、優の男性器は痛いほどに強ばっていた。

そして、硬直を極めた男性器は何かあたたかいものに包まれている。包まれているだけでなく、やさしく吸いしごかれていた。

そう。たとえるならば、唇にむしゃぶられているかのように……。

(これは……もしかして……)

「あおむけになった優の顔面に、四つん這い姿勢の女性がまたがっているのだ。

視界が薄暗いのは、スカートの顔面を覆われているため。紺色のスカートがカーテンとなつて視界をさえぎっているからだ。

甘美で濃厚な匂いは、剥き出しの花肉から漂っているもの。香水の匂いと、女性の最も秘めやかな香りが入り混じり、牡の欲望を刺激せずにはおかない香りとなっていた。

男性器に感じている吸引は、彼女が唇でむしゃぶり抜いているため……。

その女性が誰であるか、優はすぐに察した。貪るような口唇奉仕や、スカートの中にもる甘美な女陰臭によつて。

この館のメイド長・相原姫織である。

優の家庭教師であり、後見人でもある。

「お目覚めですか、優さま？」

上品なアルトボイスとともに亀頭を舐めまわされた。男根がびくびくと跳ねる。

「ひ、姫織さん……これはいったい……」

優の手は、姫織の足首によつて押さえつけられていた。四つん這いになった彼女にのしかかられているので、優は首を振ることしかできない。

「朝のご挨拶ですわ」

姫織は、優の顔をまたいだまま腰を沈め、何も穿いていない股間をすりつけてきた。

「わぷっ……んうう……」

じつとりと濡れ潤んだ女花肉を顔面にこすりまわされ、優は思わず狼狽の声を上げてしまふ。

「これくらいのことであらうたえているようでは、一人前の紳士になれませんか」

「そんなこと言われたって……いきなりだから……」

濃厚で熱い牝汗をぬりたくられて、牝の本能を激しく刺激された。男性器は、それ自体が独立した生き物でもあるかのように力強く脈動している。

「一人前の紳士たる者、こういった目覚めにも慣れておかねばなりません」

上品な性格でありながらサディスティックな一面もある姫織は、優のあからさまな肉体的反応を観察して、いたずらな笑みを浮かべていることだろう。

優の脳裏には彼女の姿が映し出された。

つやつやとした黒髪は腰に届くほどに長い。その美貌には高貴なものが漂っている。

何よりも特徴的なのは彼女の瞳。

イギリス人を母に持つ姫織は、サファイアを思わせる青い瞳をしているのだ。

胸は豊かにふくらんでおり、腰はたおやかにくびれている。そして、優のすぐ目の前でくねっている尻は、色香に満ちた丸みを帯びていた。

「あらためて、朝のご挨拶をさせていただきますわ」

姫織は、優の玉袋を左手で包み込み、睾丸ごとやさしく揉み転がす。右手では男性器の肉胴を握り、うやうやしい手つきでしごき上げる。

そして、笠を広げた亀頭に舌を這わせ、唇でむしゃぶった。

「あううっ……ううう……あっ……あうう……」

声変わりの時期はとうに過ぎていた優だが、両手と口唇を駆使した奉仕を男性器に施されて、女の子のような喘ぎをもらしてしまう。

しなやかな白指でしごかれ、肉胴はびくびくと歓喜にのたうった。唾液にぬめった舌で舐めまわされ、濡れた唇で吸引され、ふくれ上がった亀頭は喜びの牡汁を滴らせる。

「いかがですか、優さま。私のご挨拶、お気に召していただけましたか？」

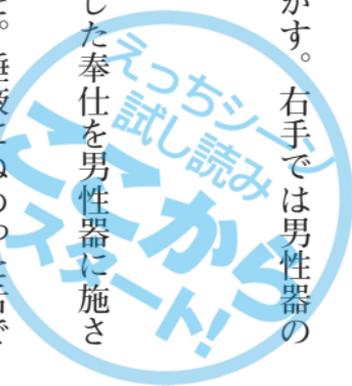
姫織は、ねっとりとした舌づかいで亀頭をねぶりながら、強ばりきった肉柱をしごき抜く。
「う……うん……。気持ちいいよ……」

手と唇を捧げての淫奉仕に、男性器は狂おしいばかりに脈動していた。

おそらく姫織は、男根の脈動をじっくりと見た上で尋ねたのだろう。あからさまな肉体反応を間近で観察されているかと思うと、優の身体は熱く高ぶった。

恥ずかしさと、そして秘めやかな興奮とで、男性器はますますいきり立つ。

「お褒めをくださり、ありがとうございます。心を込めてご奉仕いたしますわ」
四つん這いになって優の顔をまたいだまま、姫織はさらなる淫靡さで男性器を吸いむし



やぶり、うやうやしい手つきでしごく。まるで、貴いご神体に奉仕しているかのようだ。しかし……。

（ううう……はうう……。気持ちいいんだけど……何か物足りないような……じれったいような……）

熱のこもった舌づかいで亀頭を舐めむしゃぶつてくれるのだが、牡の欲望が沸点に達しようとする、急に唇が遠ざかる。代わって、亀頭の割れ口や笠裏を舌先で軽くつつかれた。はぐらかされたような気分である。

メイド長の舌づかいは、優の牡欲を満足させるためのものではない。優を焦らして、その牡欲をかき立てるためのものだ。

優の性感を知り尽くしているからこそできる技である。

（もう……我慢できないよ……）

硬直しきった男性器はもどかしさに脈打ち、亀頭はだらだらと先汁をもらしていた。

「ひ、姫織さん……お願いだから……出させて……」

「紳士たる者、そのような哀願をなさつてはいけません。泰然と構えて命令をするものですわ」

（嘘だっ）

優は心の中で叫ぶ。

（命令したら、従うふりだけして、もっと焦らしたくせに……）

姫織は、主人である優から哀願の言葉を引き出したことで、いたずらな笑みを浮かべているに違いない。

「ちようどよろしゅうございますわ。口唇愛撫を練習していただきましょう」

姫織は、剥き出しの股間を優の顔面に押しつけた。

「一人前の男性ならば、口でも女性を喜ばせなければなりませんわ」

淫奔に腰をうねりまわして、濡れ潤んだ女陰を優の顔にすりつける。

（そうなの……かなあ？）

スカートの中にこもる女陰臭のために、頭がくらくらとしていた。甘美で濃厚な臭気に魅了されて、女性器への口唇愛撫が大人の男性としてのたしなみに思えてしまう。

「上手にできましたら、ご褒美を差し上げますわ」

「う、うん……。するから……」

顔のすぐ上にあるものを優は凝視した。

黒のストッキングとガーターベルトによつて、何も穿いていない股間が際立っている。

むちつとした太腿と太腿の間には、女性器が咲き乱れていた。唇を思わせる陰門は割れほころび、紅色の花びらがめくれ返っている。

優が初めて知った女性器。そして、毎日のように犯している女性器でもある。

優は顔を持ち上げた。手を押さえつけられているので、頭を浮かせるしかないのだ。

(姫織さんのあそこ……)

彼女の股間には一切の毛がない。産毛すら生えていない。全く鬍りがないので、秘めやかな女花肉がこれ見よがしに剥き出しになっている。

成熟大人のものでありながら幼女のような無毛……。その姿は、倒錯的な淫靡さに満ちていた。

優は、咲き乱れる女陰にむしゃぶりつく。

濃密な女陰臭にくらくらとなりながら、ほころんだ陰門を吸い上げた。蜜まみれの花びらを舐め上げ、その間に舌を差し込む。れろれろと舌を蠢かせる。

「んああ……んっ……んううう……」

姫織は、抑えがちの低い呻きをもらした。年上の女性として乱れまいとしているようだ。「そ……そうですわ……。なかなか……お上手です……。んう……。んんっ……。んんあ……」息づかいを乱しながらも、性教育をする女教師として振る舞おうとしている。

「いつも姫織さんに教えてもらっているからね」

伶俐な年上女性としての姫織に憧憬を抱きつつも、優は彼女をよがり乱れさせたいという欲望に駆り立てられた。

気品あふれるメイド長をよがり乱れさせるべく、剥き身の女芯にむしゃぶりつく。愛撫

をおねだりしてふくらんでいる女芯に唇をあてがい、貪るように吸引する。

「んあああ……あひっ……ああんっ……。そ、そんな、いきなりそこは……あああ……あひんっ……」

年上として立場、また家庭教師としての威厳を保っていられず、姫織はふしだらな嬌声をかなでた。官能に乱れて身をくねらせる。

「あああ……そんなにされたら……私……もう……んああ……ああん……」
 姫織は男性器にしゃぶりついた。

口唇愛撫のご褒美というよりも、女陰から響き渡る快楽を少しでも発散しようともいうように。

（あううう……やっぱり本気でされると……すごい……）

両手と口唇を自在に使いながらの愛撫に、男性器はびくびくと悶え跳ねする。

優も、膣穴に差し込んだ舌で蜜汁を舐めまわし、剥き身の女芯を貪り吸った。憧れの女性をよがらせているかと思うと、興奮で身体が燃え上がる。姫織を感じさせたい一心で、とにかく女陰を舐めしやぶった。

「んああ……ああっ……優さま……ああっ……んああああ……」

姫織の嬌声が高ぶりを帯びてゆく。

とともに、優の牡欲も一触即発となっていた。

(はうっ、ううう……。出そう……。出そうだよ……)

男性器の根本では精液が煮えたぎっている。うやうやしい手しごき奉仕と情熱的な口唇奉仕を受け、沸き返った欲望を抑えきれない。

「ああ……。姫織さんっ……。もう……」

激しい脈動とともに、灼熱の牡汁がほとばしる。

びゅぶつ……。ぶびゅつ……。びゅぶぶ……。ぶびゅつ……。ぶびゅびゅ……。

姫織の口内に思いきり注ぎ込む。

と同時に、無毛の女陰にとどめの吸引をした。

「んううっ……。んああああああ……。あ……」

唇の端から白濁の涎を垂らしつつ、姫織は身を仰け反らせる。

成熟した女体は官能に悶え、這いつくばった姿勢で細かにわなないていた。

肉体の芯にまで快楽が響き渡り、力が入らない様子だ。肉感的な肢体はぐったりとしている。

びゅくびゅくと噴射し続ける牡汁を顔にあびながら、姫織は女の喜びを極めたのだ。

「優さま……。とつてもお上手でしたわ。お許しをいたただく間もなく、気をやってしまいました……」

いまだに硬度を保っている男性器へ姫織は口づけし、尿道に残った精液まで吸い上げる。

「姫織さんのお口も……すごく気持ちよかったですよ……」

優も、しとどに濡れそぼった女花肉へむしゃぶりついて、姫花卉の間で舌を蠢かせる。麗しのメイド長と若い主人は、窓から差し込む光の中で、互いの性器を唇で貪りあっていた。

「お顔をお清めいたしますわ」

女汁でぬらぬらになった優の顔を、姫織はうやうやしく舐め清める。

牝獣のような四つん這い姿勢の姫織が、あおむけの主人に覆いかぶさって、舌を這わせていた。女汁を舐め清めるとともに、唾液をぬり込んでゆく。

さながら、牝獣がマーキングを施すように。

（姫織さん……）

優は彼女の高貴な美貌に見とれていた。

くつきりとした目鼻立ち。青空のように澄んだ瞳と、それを彩る長いまつげ。腰まで届く黒髪を飾るのは、白のカチューシャ。そして彼女の肉感的な身体からは、ほのかによい香りが漂っている。

憧れの女性に顔を舐めまわされ、一度は精を放った男性器が再び膨張の兆しを見せつつあった。

「あら、私といたしましたことが、肝心なことを忘れていましたわ」

姫織は、胸の谷間から何かを取り出す。

「それは？」

見慣れない器具だ。

本体は銀色をした金属の輪である。その直径は、指三本が通るかと思われないかといった大きさ。銀色の輪からは三本の細鎖が伸びている。

「優さまのため、特別にあつらえましたの」

青い瞳のメイド長は、高貴な美貌にいたずらな笑みを浮かべる。

「お付けいたしますわ」

二本の鎖を腰にまわされ、背中で施錠された。さらに、銀色の輝く金属輪を……男性器に嵌められる。

（あうっ……。これは……。もしかして……）

三本目の細鎖が股間をくぐった。尻へ喰い込まされ、たるみのないように引っ張り上げられてから、やはり背中で施錠される。

ちようど、鎖のふんどしを穿かされたかのような。単なるふんどしでないのは、金属の輪を男性器の根本に嵌められている点である。

「ペニスリングですわ。これを嵌めていれば輸精管が締めつけられて、射精を封じることができませんの」

銀の輪は、男性器の根本にぴったりと嵌まっていた。射精後の今でちょうどよいきつきである。もし男性器が極大まで勃起したら、痛いほどの締めつけとなって着用者をさいなむことだろう。

「こ……これ、何だか痛そうなんだけど……?」

優は、おそろおそろ姫織の顔色をうかがった。

すっかり女教師の顔になった姫織だが、その青い瞳には、かすかながら嗜虐の光が見取れる。

「ご心配にはおよびませんわ。鍵はこの私が責任を持って管理いたしますから」

(それが心配なんだけど……)

きつと、鍵を外してもらうためには、性教育の実技演習をしなければならぬのだろう。女教師となった姫織の許しを得るまで。

「この器具で持久力を養っていただきます」

「じ……じきゆうりよく……?」

「はい。本当は鞭で縛るつもりでした」

(ひえっ……鞭で……)

優の顔が引きつる。

姫織は鞭の名手だ。一メートル以上ある一本鞭を振るって、ショートケーキのいちごだ

けを正確にはじき飛ばすことができるほどである。

実際に鞭で打たれたことはないが、威嚇されることはしばしばだ。優にとって、姫織の鞭は畏怖の対象である。

「しかし、やはり鞭で縛るのは問題があります」

（そ、そうだよ。俺にも僕は『ご主人さま』なんだから……）

「鞭で縛ってしまえば、優さまを鞭でしつけることができなくなってしまいますから」
（そっちですか……）

心の中で突っ込みつつも、高貴かつ嗜虐の香りのする微笑に優は魅せられてしまうのだ。
つた。

「では、朝食にいたしましょうか」

「う、うん。でも……この格好は……」

優は、普段から姫織に朝の着替えを手伝ってもらっている。学校がある日は当然のことながら制服を着せられるのだが、今はたった一枚のTシャツを着せられているだけだ。

他には下着すらも穿いていない。

Tシャツの裾の下には、ぶらぶらと揺れる男性器があらさまになっている。

「本日はお休みですので、最も女性を犯しやすい格好をしていただきました」
食堂へと向かいながら、優は恥ずかしさに顔を赤らめていた。

(股間が……すーすーするよ……)

何も穿いていない股間がとても頼りなく感じられる。しかも、歩きたびに男性器が揺れて、何も穿いていないことをさらに強く意識させられた。

館の食堂には、すでに朝食の用意がされていた。

長テーブルのかたわらには、三人のメイドたちがひかえている。

「おはようございます、ご主人さま」

三人は声を合わせて挨拶をし、深々とお辞儀をする。

彼女たち三人は、かつては優の敵対者であった。正確には、敵対者の手下であった。三人がかりで姫織をはずかしめたこともある。

しかし今では、すっかり姫織に手なずけられていた。一般的なメイドとして家事をこなすとともに、優の性欲を処理するためにその肉体を捧げるのだ。

三人は、優の格好を見て一様に顔を上気させた。Tシャツの裾の下で揺れている男性器に目が釘付けとなっている。

(ううう……そんなに見られると……恥ずかしいよ……)

なまじTシャツを着ているので、剥き出しの股間が際立っていた。女性たち三人から男の象徴を見つめられ、恥ずかしいような嬉しいような感覚が湧き上がってくる。

ペニスリングを嵌められた男根がびくびくと跳ねた。

優もまた、メイドたちの姿に心を奪われてしまう。彼女たちが穿いている紺色のスカートは丈が極端に短い。膝上丈どころか、股下ぎりぎりである。立っただけで股間の底部が見えてしまいそうなほどだ。

エプロンの前かけも小さくて、股間を隠してはくれない。見え隠れする女唇を引き立てるアクセサリーとなっていた。

彼女たちが穿いているスカートは、女の恥部を隠すためのものではなく、淫らに飾り立てるためのものだ。

「優さまのお情けをいただきやすいように、特別の衣装を考案いたしましたわ」
見入っている優に、姫織が肉感的な肢体をすり寄せてくる。

「朝食の前に、あの娘たちを味わってみてはいかがでしょう。紳士たる者、起き抜けにメイドを犯すくらいの雄々しさがなければいけませんわ」

姫織は、そつと優のそばを離れて、胸の谷間から黒い鞭を取り出した。三人のメイドたちに向きあい、冷ややかで淫らな微笑を浮かべる。

「あなたたち、優さまのお召しよ。壁に手をつけて、お尻を並べなさい」
鞭を一閃させて床を打つ。

びしっ。

その鋭い音に、メイドたちだけでなく優までもが身を強ばらせた。

「は、はいっ。ただ今……」

姫織の鞭の味を身体に教え込まれてきたメイドたちは、すぐさま命令通りの姿勢を取る。両手を壁につき、脚を広げて、尻を後ろへと突き出す。犯してくださいと言わんばかりの姿勢だ。

前かがみになったため、極短のスカートはずり上がってしまふ、尻肉の上部分しか覆っていない。メイド長である姫織と同じく、彼女たちもショーツを穿いていなかった。ストッキングとガーターベルトをつけているのみだ。

尻肉の丸みも割れ目も、そして割れ目の底に息づく女唇も、全てが優の目にさらされている。しどけなく割れほころんだ女唇には、やはり姫織と同じく一切の陰毛がない。花弁がはみ出るほどに成熟した女性器が、幼女さながらの無毛で横たわっているのだ。

（うわっ……）

優は牡欲の高ぶりを感じていた。

三つ並んだ尻肉を目の当たりにして、また、無毛の女唇を前にして、男性器はびくびくと脈打つ。牡の血潮が大量に流れ込み、天を衝くほどにそびえ立った。

「あうっ……」

肉柱が膨張するのにもなつて、根本に嵌められたペニスリングに締めつけられる。

「いかがなさいました？」

鞭を手にした姫織は、嗜虐の香りがする微笑を浮かべていた。優が呻いた原因を完全に悟っている様子だ。

締めつけにさいなまれて脈打っている男性器を、しなやかな白指でそつとなぞり上げる。「これしきの痛みに負けてはなりません。あの娘たちに、主人の威厳と牡の逞しさを知らしめてやってくださいませ」

裸でさらされている尻を、平手でびしゃりと叩かれた。

「う……うん……」

締めつけられていつも以上に脈動している男性器を、メイドの尻肉に突きつけた。

美しいメイドたちが三人そろって尻を並べている姿は、倒錯的な淫らさに満ちている。

彼女たちは、優の肉欲の捌け口として、最も秘めやかなところを差し出しているのだ。三つ並んでいる尻肉は、さながら、牡の欲望を排泄するためだけに存在する肉の便器でもあるかのようだ。

しかも三人のメイドは、喜々として肉体を捧げている。鞭に脅されて尻を突き出しているというよりも、女陰にわだかまっている牝欲に駆られて姦通をおねだりしていた。

三人とも、優の男根を求めて、尻肉をいっばいに後ろへ突き出している。太腿の間に咲いている女陰花は発情の蜜汁に潤んでいた。

「ご主人さま……どうかご主人さまの逞しいものをください……」

「もう待ちきれません……。逞しいおちんぼで……お情けをくださいませ……」

「おちんちんに溜まっているもの、わたしのあそこに吐き出してください……」

メイドたち三人は、一刻でも早く優の男性器をくわえ込みたいとばかりに、尻肉を疊惑的に揺すりまわしている。

優は、左端の娘の尻肉をつかんだ。

滴るばかりに濡れ潤んだ女花肉に亀頭をあてがい、一気にえぐり上げる。

「んああああああ……」

主人の逞しい男性器で突き上げられ、左端のメイドは背を反り返らせた。

優は、牡の欲望にまかせて荒々しく腰を叩きつける。目の前に捧げられた尻肉を征服するかのように、強ばりきった肉柱を打ち込んでやった。肥大して笠を広げた亀頭で、女の秘めやかな肉穴をこすり上げる。

「あああ……あひつ……ああん……。ご主人さま……。ご主人さまのおちんぼ……。いいです……とつてもお……」

優が男性器を打ち込むたびに彼女は歓喜の声を上げた。言うなれば、優の男性器で啼かされているのだ。

メイドの女肉穴は甘美な喰い締めで優をもてなしてくれる。牡の象徴は歓喜に脈打って

いた。

とはいえ、優も快感にばかり浸ってはいられない。ペニスリングで男性器の根本を締めつけられているからだ。

「うっ……あうっ……ううう……」

女陰をえぐり上げるごとに、快感のみならず小さな痛みをも味わわれる。

「優さま。腰づかいが振るわないようですが、私がお手伝いして差し上げましょうか？」
姫織は床を鞭で打ち鳴らした。

ぴしいんっ。

(ひうっ……)

メイド長の鞭におびえて優は身を強ばらせた。主人であるはずの優だが、性のことに関しては主従が完全に逆転してしまう。

鞭に駆り立てられて優は激しく腰を叩きつけた。

「んああ……あああ……あんっ……ご主人さま……あっ……ああん……」

壁に手をついたメイドは、牡の象徴を荒々しく打ち込まれて、はばかりことなくよがり啼く。

じゅぶじゅぶという濡れ音がするほどに優は男性器をえぐり込んだ。ペニスリングの痛みにさえ牡の欲望をかき立てられ、腰づかいの荒ぶりを加速させる。

「んああっ……あんっ……んああ……」

心ゆくまでメイドの啼き声を堪能してから、優は男性器を引き抜いた。根本を締めつけられた男性器は、出そうにも出せない牡欲を溜め込んで、いつもよりもさらに膨張しているように見える。

発情の女汁にまみれた肉柱を、真ん中のメイドに突きつけた。

「ああ……ご主人さま……。ご主人さまのおちんぽで……えぐってくださいませ……」
蠱惑的なくねりで挑発する尻肉を驚づかみにして、潤みきった女陰穴に男根を打ち込んだ。あたたかい肉壺を征服し、味わいつくすべく、ぬるついた粘膜をこすり上げる。

「ああ……んあ……ちんぽ……ご主人さまのおちんぽ……とってもいいです……」
メイドの女肉穴は貪欲に吸いついてきた。優のものにおもねるかのように収縮し、潤沢な蜜汁で供応してくれる。

心地よい肉穴を十分に味わってから、優は男性器を引き抜いた。女にとどめをさすことなく。

「ああ……ご主人さま……どうか最後まで……。あとほんの少しで……」
姫織が鞭を鳴らす。

おのれの欲望のためのおねだりするという不躰な真似をしたメイドに警告を与えるためだ。

「またあとでしてあげるね」

優は、彼女の濡れた女陰をかすめるようにひと撫でしてから、右端のメイドに情けをかけてやる。

「ご主人さま……お待ちしておりました……。待ちこがれておりました……」

よほど優の肉柱を待ち望んでいたのか、彼女は床を汚すほどに蜜汁を滴らせていた。

女陰にわだかまっている牝欲を少しでも発散しようとしたのだろう。発情期の牝獣さながらに尻肉をうねり舞わせていた。

牝の欲望に身悶えしている女尻を目の当たりにして、温厚な性格の優にも嗜虐の性向が芽生えてくる。

「待たせちゃってごめんね」

やさしく言いながらも、泣き濡れた女陰を焦らすかのように亀頭でつついてやった。つついたり軽くこすり上げるだけで、なかなか入れてやらない。

たまらなくなつたメイドは、おもねりを交えずに心の底から男根を懇願してしまう。

「お慈悲を……。ご主人さまのおちんぽで、どうかお慈悲を……」

おもらしをしたかのように女陰から蜜汁を滴らせつつ、男のものを求めて淫奔に腰を揺すりまわしていた。今の彼女ならば、おしっこをしろと命じられてさえ、一瞬の躊躇もなく従うであろう。

「たっぷり犯してあげるよ」

欲求不満に悶え泣きしている女陰を、優は荒々しくえぐり上げた。女体の芯まで串刺しにするつもりで女肉穴を打ち抜く。

「ひあつ……あああつ……んあああつ」

牝丸出しの声でメイドはよがり啼く。

肉感的な女尻を歓喜にわななせながら、女の喜びに我を忘れていた。

優が男性器を打ち込むたびに、小さな濡れ音とともに蜜汁が飛び散る。

気をやる寸前にまで官能をかなでておいてから、優は別の女尻へと矛先を変えた。

名残を惜しむ声、肉交をおねだりする声に彩られながら、三人のメイドを代わる代わるに陵辱する。三つ並んだ尻肉へ、次々と肉杭をえぐり込んでいった。

（ううう……出したいけれど……出せないいい……）

ペニスリングの締めつけで男性器はびくびくとのたうち跳ねている。

目の前に捧げられた三つもの女尻を好き放題に犯し散らしているというのに、優は欲望を吐き出せずにいた。欲望はただ溜まってゆく一方である。吐き出したくても吐き出せないことが、狂おしいほどの渴望となつて優をさいなむ。

決して満たされない欲望をぶつけるかのように、優は三人のメイドを貪り犯した。歓喜を極める一歩手前まで高ぶらせておいてから、はぐらかすように隣のメイドへ肉柱を与え

る。

そうやってメイドたちを焦らしに焦らし抜いているのだ。

「ふふふ……。優さまにも、主人としての風格が備わりつつあるようすわ」

姫織は、Tシャツしか着ていない優を見つめながら一本鞭をもてあそんでいる。その嗜虐に満ちた微笑には、優の可愛らしい尻を鞭打ちたいという欲望がにじみ出ている。

「んあああ……。あん……。あんつ……。ご主人さまのちんぽ……。とつても……。んひいひい……。」
 高い声でよがり啼くメイドの両隣では、牝欲のわだかまりに悶えて二人のメイドが尻肉をくねらせている。

「どうか……。どうか次はわたしに……。ご主人さまのちんぽをいただくかなければ……。おかしくなつてしまいます……。」

「いいえ……。わたくしに……。わたしのお情けをくださいませ……」

満たされ得ぬ肉欲に突き動かされている優は、二つ並んだ美尻肉を貪っているうちに、ある欲望に目覚めた。

（三人を一緒にいかせたいな……）

荒れ狂う牝欲のままに真ん中のメイドを犯しつつ、左右のメイドにも手を伸ばす。羨ましそうにくねっている女尻をまさぐり、ふしだらに濡れ乱れた女陰を撫で上げた。

中指で女肉壺をえぐりまわしながら、親指の腹で尻穴を揉みこねる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>